

表現運動における教師行動が学習成果に及ぼす効果について

－4年生「われらジャングル探検隊」の授業を対象事例にして－

宮脇せりあ（兵庫教育大学）

1. 目的

本研究は、教職経験年数3年の男性教師2名を対象に、4年生表現運動の教材研究や指導方法に関する資料を提供し、授業中の教師の言葉かけがどのように行われたのかについて、学習成果（態度得点）との関係から明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

- 1) 対象授業：兵庫県と香川県の小学校2校において、令和3年6月（A学級）と10月（B学級）に行われた「われらジャングル探検隊」（単元5時間）を対象とした。各教師には教材研究や指導方法に関する資料（DVD含む）を単元前に提供した。
- 2) 教師の発話データの収集：ビデオカメラとICレコーダーを用いて単元2～4時間目の授業を収録し、逐語記録を作成した。
- 3) 調査内容：学習成果として態度測定（小林, 1978）を実施した。また、教師の言葉かけについては、高橋ら（1991）の教師行動観察法を参考に分析・検討した。

3. 結果と考察

1) 態度測定について

A学級男子は単元後「高いレベル」「かなり成功」、女子は「高いレベル」「成功」であった。一方、B学級男子は単元後「やや高いレベル」「アンバランス」、女子は「やや低いレベル」「やや失敗」であった。

2) 教師の言葉かけについて

導入段階において、A学級の教師（以下、A教師）は「相互作用（75.8%）」が多く、「直接的指導（16.3%）」が少ない傾向にあった。「相互作用」のうち「発問（12.5%）」と「肯定的フィードバック（30.8%）」が多かった。これらにより、表現に対する不安を取り除き、積極的に活動に取り組める雰囲気をつくっていたものと考えられる。一方、B学級の教師（以下、B教師）は「相互作用（46.0%）」と「直接的指

導（46.6%）」が多い傾向であった。「直接的指導」のうち「指示（44.8%）」が多く、「歩く」、「走る」、「手拍子」を多く使用していた。これらより、教師が中心となり、授業展開していたものと考えられる。

展開・終末段階において、両教師ともに「相互作用（A教師73.1%、B教師67.1%）」が多く、「直接的指導（A教師18.3%、B教師28.5%）」が少ない傾向にあった。「相互作用」のうち「肯定的フィードバック」が多く、両教師ともに積極的に児童の動きを認め、積極的に活動に取り組める雰囲気をつくっていたものと考えられる。その一方、A教師は「発問（創意的）」と「肯定的フィードバック（認知的）」がB教師より顕著に多く、児童のイメージや動きに広がりを持たせていたものと考えられる。これに対して、B教師は活動に集中できない児童に「指示（注意）」を与えることが多く、学級全員を巻き込む授業ではなかったものと考えられる。

4. 結論

学習成果（態度得点）を高める教師の言葉かけとして、①「相互作用」を多く、「直接的指導」を少なく用いていた、②「発問」と「肯定的フィードバック」を用いて積極的に活動に取り組める雰囲気をつくっていた、③「発問（創意的）」と「肯定的フィードバック（認知的）」を用いて児童のイメージや動きに広がりを持たせていた。

5. 主な参考文献

- 1) 江藤真生子（2015）小学校体育授業における教師の「言葉かけ」の検討－表現運動とゲーム授業を事例として－, 日本女子体育連盟学術研究, 31巻, 47－57
- 2) 高橋健夫・岡沢祥訓・中井降司・芳本真（1991）体育授業における教師行動に関する研究－教師行動の構造と児童の評価と関係－, 体育学研究, 36, 193－208